

病 害 虫 名	症 状	対 策
根 朽 病	苗床で発生が起こりやすい。地際部に近い莖が細くくびれて枯死する。	生育初期に降雨が多いと発生しやすい。苗床を過湿状態にしない様に管理する。病気と思われる株は抜き取る。
萎 黄 病	苗床や畑で発生する。定植後の苗の最初2～3枚の下葉が黄色く変色する。葉柄を切断すると導管が黄色もしくは暗褐色に変色している。	必ず抵抗性品種を栽培する。抵抗性を有するものはYRと記されている。
黒 腐 病	主に下葉から発生し、葉のへりに葉脈を中心としたV字型の黄色い病斑ができる。	台風などによって葉に傷口ができると発生しやすい。特に雨水などによって感染が拡大する。そのため茎葉が傷ついたあとの薬剤散布が特に大事である。
根 こ ぶ 病	晴天の日中から下葉がしおれ生育が進まず、結球期になってもほとんど結球せず残る。	連作圃場で、夏から秋にかけて降雨が多いと発生しやすい。また、pH6.0以下の酸性土壌では発生が多く、pH7.2以上のアルカリ性土壌は発生が少ない。そのため酸性土壌では石灰を施用し、アルカリに矯正する。また、被害株は早めに抜き取る。
べ と 病	下葉に黄緑色の病斑が形成され、その裏側を見ると白色のカビが霜のように生える。	低湿地に発生が多い。また、窒素肥料にかたよりすぎると発病しやすい。早期に発見し、薬剤散布を行うことに重点をおく。
菌 核 病	結球部の一部あるいは全体が柔らかく腐る。発病部には白い綿状のカビが生え、表面にはねずみの糞のような黒色の菌核ができる。	発病する前に薬剤散布を行う。また、発病した株は早期に抜き取る。
ア ブ ラ ム シ 類	特に灰色のダイコンアブラムシに注意する。最初は一番外の葉に寄生するが密度が増えると内葉に移り、縮れや萎ちようを引き起こす。	高温少雨のときに多発する。葉や土に白い脱皮殻が落ちてると多発生している可能性があるため早期に薬剤で除去する。
コ ナ ガ	主に幼虫が葉を食害する。葉の裏から葉肉だけを食べ、葉の表皮を透けて残す。	冬でも加害する。結球をはじめたときに防除を怠ると中にまで侵入するので早期に防除する。フェロモントラップや誘蛾灯を使用し親虫を捕殺するのもよい。
ヨ ト ウ ム シ 類	主に幼虫が葉を食害する。集団で葉の裏に群がるため脱皮するにつれ被害が甚大なものになる。	小さいうちに発見することが被害を最小限に抑えられる。このときに薬剤散布することが重要である。
ア オ ム シ	被害はヨトウムシと似ている。必ず葉の上で食害する。	発生加害期がヨトウムシとほぼ一致するので、ヨトウムシと同じ防除を行う。
ハイマダラノメイガ	主に幼虫が被害を及ぼす。生育初期の芯を食害するため定植後に腋芽が出てくる。そのため正常な結球状態にはならない。	夏季に高温少雨で残暑が厳しいと多発する。多発生が予想される場合には特に気をつけ薬剤を散布する。